

# 篠山市の歴史文化をいかしたまちづくり

京都府立大学文学部歴史学科 2 回生  
高橋 一壽

## はじめに

フィールド研修 1 日目の平成 26 年(2014) 9 月 2 日午前 11 時ごろ、私たちは篠山市役所を訪れた。そして市役所の第 2 庁舎 3 階の会議室で、篠山市教育委員会の社会教育・文化財課で文化財行政に携わっている成田雅俊氏から、篠山市での歴史文化をいかしたまちづくりへの取り組みについて話を聞いた(写真 1)。本稿では、その際の話と質疑を中心に、午後に訪れた篠山市立青山歴史村と篠山市立歴史美術館の見学記録を加えて、調査報告としてまとめる。

## 1 篠山市の取り組み

### (1) 市制発足後の主な文化財事業

篠山市は、平成 11 年 4 月に、篠山町・今田町・丹南町・西紀町の旧多紀郡の 4 町が合併して誕生した。人口は約 43,000 人(平成 26 年(2014) 8 月末)で、現在は減少傾向にある。基幹産業は農業や観光業であり、地域の特産物(黒枝豆・山芋・丹波陶磁器など)や、それらをいかしたイベントを目的とした観光客が近年増加している。

まず、成田氏は篠山市制発足後の文化財行政について説明された。篠山市の指定または登録等の文化財は市域内に 214 件存在し、市に合併したのち、新たに国や市の指定文化財となったものが十数件ある。

篠山市発足後の文化財関係の主要事業のひとつが、史跡篠山城跡とその周辺に形成され

た近世の城下町の整備事業である。この事業計画は、昭和 46 年(1971)から現在まで継続されている。史跡内の私有地の公有化事業も昭和 49 年(1974)からおこなっており、平成 24 年(2012)に民有地の買い上げ事業はほぼ完了した(現在 98%が国県市の公有地)。篠山城については、石垣の修理と庭園の整備が完了し、現在は内堀の復元や整備を進めている。なお、大書院の復元整備が、平成 8 年(1996)から平成 11 年(1999)にかけてなされた。

埋蔵文化財等の発掘調査については、開発事業に伴っておこなわれていたが、平成 15 年ころに大規模な開発事業が少なくなり、本格的な発掘調査はそれ以降おこなわれていない。現在は、個人住宅建設に伴う立会い調査が主におこなわれている。また、平成 12 年(2000)以降は、文化庁の民俗文化財の補助事業(伝統文化保存団体基盤整備事業)を活用し、山車・道具・衣装等の修理に取り組んだ。

さらに、旧多紀郡 4 町の合併を契機に、それまでではできなかった仕事に取り組めるようになった。そこで、平成 13 年(2001)から平成 14 年(2002)にかけて、中世の山城である八上城の国史跡指定に向けた調査をおこなった。平成 16 年(2004)には国史跡に指定され、翌年度に史跡八上城跡保存管理計画を策定した。また、篠山城下町の町並み保存の事業として、平成 13 年から平成 15 年(2003)にかけて「篠山城下町伝統的建造物群保存対策調査」を実施し、翌年の平成 16 年に重要伝統的建造物群保存地区(以下、重伝建地区)に選定された。

以上に挙げたような篠山城や八上城の修理・整備、城下町の町並み保存に取り組みつ



写真1 篠山市教育委員会 成田雅俊氏による講演の様子

つ、そのほかにも、重要な建物を重要文化財に指定したり、波々伯部神社のおやまの神事を無形民俗文化財に選択していった。このような事業に平成11年から平成16年にかけて取り組み、旧町時代の課題となっていた、未指定または未調査の主な文化財については調査登録を完了した。それ以降は、文化財の保存修理として、城下町では毎年6件から8件程度の建物の修理を進めたり、地域の住民とともに講演会や現場の見学会を開催したり、勉強会を実施したりしている。

最近では、篠山城下町が重伝建地区に選定されたことを受けて、かつて農村集落であり宿場町でもあった福住地区の町並み保存に取り組んだ。城下町の町並みの整備が進められる様子を見た福住地区の住民の間で、自分たちの集落の保存整備への関心が高まっていたという。そこで、平成19年(2007)から平成20年(2008)にかけて「福住地区伝統的建造物群保存対策調査」を実施し、平成24年に重伝建地区に選定された。

このような福住地区の取り組みを進めると同時に、篠山市の歴史文化についての基本

的な構想を策定するため、平成20年から文化庁の文化財総合的把握モデル事業の採択を受け、歴史文化基本構想の策定に取り掛かった。そして平成22年(2010)に歴史文化基本構想を策定し、それ以降はこの構想に基づいて各種の文化財行政を進めている。

## (2) 歴史文化基本構想の策定経過

構想が策定された当時の状況であるが、福住地区を重伝建地区に選定するにあたって、城下町の重伝建地区、八上城跡、波々伯部神社のある地区のすべてを総合的に保存整備すべきではないかという指導が県からあり、その計画づくりに苦慮していたという。またその頃、城下町の重伝建地区のほうでは、住民・行政・専門家の三者が連携して文化財の保存活動をおこなっていたので、そのような環境づくりを市全体に普及させたいと考えていた。

ちょうどその折、文化庁が文化財総合的把握モデル事業を発表した。そこで、この事業を利用して文化財の保存の環境づくりも含め

た歴史文化基本構想を策定しようということになった。

しかし、構想を考える段階でいくつかの課題が浮き彫りとなった。まず一点目として、文化財の総合的な調査（分布調査等）が実施されていなかったことが挙げられた。これまでの調査は一部のものとどまり、地域に眠っている未指定文化財の荒廃が進行するおそれがあった。そこで、文化財を正確に把握して保存活用し、まちづくりに役立てていこうと考えた。また二点目として、人口減少や少子化による文化財の担い手の減少が挙げられた。次世代へと文化財を継承する担い手の育成も、問題となっていた。

そこで、課題解決のための三つの目的が設定された。篠山らしさの証ともなる文化財の総合的な把握調査を実施すること、そこで把握された文化財の保存活用を図り、地域の魅力や誇りの向上に役立て、次世代への継承を目指すこと、そして市全体または地域ごとに歴史文化をいかしたまちづくりを進めることである。

文化庁の委託を受けて構想策定に取り組んだわけだが、その基本構想のテーマとして「日本の原風景篠山」を設定した。「原風景」の定義づけはいろいろと考えられるが、ここでは篠山市の歴史文化を表す目に見える風景を指している。このテーマであれば市内全域の文化財を対象とすることができ、さらに地域の住民が積極的に保存活用に取り組めると考えたからだ。

そうしたテーマを設定した後、文化財の総合的な把握調査が実施された。調査は、既存資料の整理や現地調査、住民へのアンケート調査などをおこなう把握調査と、モデル地区での現地調査にもとづく保存活用の検討をおこなう詳細調査のふたつに大別できる。策定委員会のもとに設置された調査部会が、それぞれの専門分野（景観・建造物・自然環境・防災）の観点から現場調査を担当した。対象となる文化財は、近代以前を起源とした篠山の原風景を構成するものであり、把握した文化財は、データベース化や地図情報化、まちづくり資産カルテの作成をしてまとめられた。

そして、調査の結果、市全域に多種多様な文化財が多数存在すること、歴史文化を伝え

てきた人たちがいることが明らかとなった。実際に、住民へのアンケート調査の結果、指定文化財のほかに4,711件の文化財が把握されている。このことから、市内に多種多様な文化財が存在するという環境をいかして、また市民や自治会や組織などによって身近な文化財の保存活用が進められていることから、仕組みづくりや教育への活用、人づくりや組織作りに主眼を置いた歴史文化基本構想の策定をめざした。つまり、歴史文化をいかしたまちづくり、そして学校教育、社会教育への活用を推進するための構想が策定された。

### (3) 構想策定後の取り組み

歴史文化基本構想が策定された平成22年以降、市はさまざまな取り組みを進めた。この構想は教育委員会が議論して策定したもののだが、構想策定以前はあまり文化財のことを議論で取り上げていなかった。しかし、策定を機に、文化財を教育に利用しようという機運が高まり、地域の小中学校において地域の歴史文化について学習する機会を設けた。また、史跡篠山城跡の保存管理計画も見直され、それまでの城単独の保存方針から、城下町との一体的な保存整備、そして活用をおこなう方針へと転換した。

そして、構想の主眼であった、地域主体のまちづくりに取り組む団体を支援するため、地域の歴史文化をいかしたまちづくり助成事業を創設した。助成対象となる団体は各地区のまちづくり協議会等5団体で、研修会や見学会の開催、文化財マップや案内板の作成を助成金でおこなった。最近では、この事業を利用して積極的に地域づくりに取り組む団体が増えているようだ。例えば八上地区では、観光者向けの案内を目標にした八上城ふるさとガイド養成講座というものがひらかれた。

### (4) 質疑の内容

この節では、成田氏の話の後に行われた質疑についてまとめる。

「篠山市の歴史文化をいかしたまちづくりに対する市民の反応」に関する質問に対して、



写真2 篠山市立青山歴史村



写真3 篠山市立歴史美術館

成田氏は「地域ごとに文化財管理に対する温度差があり、積極的に市の制度や事業を上手に利用して次世代に継承しようという動きが盛んな地区もあれば、一方で関心が薄い地区もある。市が財政難であるため、自主的に民間の資金を利用している団体もあり、さらなる支援が必要だと感じている」と答えられた。

次に、「原風景とはどのようなものなのか」という質問があげられた。これに対しては、「篠山市の歴史文化の特徴を示すような農村景観であり、住民がイメージしやすいような不動産的なものをテーマ設定の中心においた」と説明された。

また、「歴史文化をいかしたまちづくりに取り組み始めたきっかけは何か」という質問に対して、「篠山城下町の重伝建地区内の建造物の整備をおこなった際に、単に文化財を整備するだけでなく、その地域の活性化につなげたいと考えようになったためである。現在では町並みの整備やイベントの開催を通じて、歴史に対する興味関心を市民に持ってもらえればと考えている」と当時の思いも含めて語られた。

さらに、「歴史文化をいかしたまちづくりに取り組む際の他部署との連携や、市のなかでの歴史文化基本構想や文化財の位置づけはどのようなになっているか」という質問に対して、成田氏は「構想策定の時期が市の各種計画の時期と重なり、他部署の計画に歴史文化の視点を盛り込んでもらうことができた。市の総合計画の中でしっかりと位置づけをして、これからの歴史文化に対する行政の方向

性が示せたのが大きいと思う。まちづくりにおける他部署とのやりとりについては、文化財の調査結果をデータベース化してその情報を共有し、古民家修理や景観保護に共同で取り組んでいるので、文化財を気にしてもらえるようになったかなと感じている」と語られた。

最後に、「文化財の枠を超えたまちづくり事業で、文化財を資源として有効に活用できたのはなぜか」という質問があがった。成田氏は「構想策定の際には既にほぼ9割の小学校区でまちづくり協議会が組織されていて、継続して地域の活性化を図ってもらえたらと考え、歴史系の部会があるまちづくり協議会を中心に支援をおこなったのが効果的だったと思う。市の総合計画のなかで地域主体のまちづくり行政を位置づけられたのも一因だろう」と説明された。

## 2 展示施設の見学

### (1) 篠山市立青山歴史村

篠山市役所の近くの物産店で昼食をとったのち、篠山市民センターで、一般社団法人ノオトの金野幸雄氏から篠山における地域再生の取り組みについてお話をうかがった。これまでの新技術志向から脱却し、古民家再生などによる空間の整備から地域おこしを始めようということだった。

金野氏のお話をうかがったのち、我々はそ

れぞれに周辺の博物館施設を見学した。

私がまず訪れたのが、篠山市立青山歴史村である（写真2）。篠山城大書院から徒歩5分ほどの場所にあり、施設正面にある茅葺の長屋門が印象的だった。青山歴史村は、篠山の藩主であった青山氏の別邸を利用したもので、藩政文書や藩校で使われていた教漢学書の版木、印判や衣類が展示されていた。

## (2) 篠山市立歴史美術館

青山歴史村からおよそ徒歩10分の場所に歴史美術館は設置されている（写真3）。館は明治時代に裁判所として建てられ、昭和57年（1982）に歴史美術館として開館した。当時の建物を、開館の際に90度回転させて今の外観となっているらしい。武具や絵画、陶磁器や銅鏡が展示されているが、いずれも篠山ならではの歴史を示す重要なものである。

## 3 抱いた印象と感想

今回のフィールド研修を通じて感じたのは、地域の歴史文化やそれを伝承する文化財は、地域の住民の実生活の一側面であり、相互に密接な関わりを持っているということだ。「モノ」、すなわち文化財の価値ばかりを重視しては、真に継承されているとはいえず、実際の暮らしのなかで使われてこそ

真の継承なのだと感じさせられた。

また、文化財の保存と継承をするにあたっては、地域の住民の理解と協力が必要不可欠なのだというのも、フィールド研修を通じて抱いた大きな印象だ。篠山市の社会教育・文化財課の方々と地域の住民の方々が協力しながら、文化財を守り伝えてきた歴史を感じた。そしてこれからも、文化財を取りまく人たちが協力して未来に継承していこうとする姿勢が感じられた。

### 【謝辞】

本稿を作成するにあたって、篠山市教育委員会の成田雅俊様にはたいへんお世話になりました。末尾になりますが、厚くお礼申し上げます。

### 【参考文献・URL】

篠山市教育委員会（2011）『篠山市歴史文化基本構想』篠山市教育委員会  
「兵庫県篠山市ホームページ」<http://www.city.sasayama.hyogo.jp/>（2014/10/05 最終閲覧）

### 【受贈資料】

篠山市教育委員会社会教育・文化財課（2014）『歴史文化をいかしたまちづくり～篠山市での取り組み～』  
一般社団法人ノオト「ノオトの概要と戦略」A4、5枚